

Title	表紙 目次
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1959
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.12 (1959. 12)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19591201--001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田學會雜誌

慶應義塾經濟學會
十二月号

昭和三十四年下半年總目次

經濟學關係文獻目錄

書評及び紹介

封建領主制確立期における淺野氏……………速水 融(四)

レウデス考……………宇尾野 久(三)

『精神現象学』の疎外論……………遊部 久 蔵(一)

論 說

第五十二卷

第十二号

昭和三十四年十二月二十四日
昭和三十五年一月一日
第三種郵便物認可
第一、九〇三行

昭和三十五年十二月二十四日
昭和三十四年十一月十三日
第三種郵便物認可
第一、九〇三行

三田学会雑誌

昭和三十四年十一月号

定価 金九〇円

(送料別)

MITA GAKKAI ZASSHI

(Mita Journal of Economics)

Vol. 52, No. 11

November, 1959

CONTENTS

Some Reflection on the Agrar-Policy in the Last Stage of the <i>Tokugawa</i> Period. (continued)	Page
<i>Okai Rentei</i> (1751~1826) and <i>Aizawa Seishi</i> (1782~1863)	<i>T. Shimazaki</i> (1)
Estimation of the Steel Production Function in Japan	<i>G. Iwata</i> (16)
The History of the German Social Democratic Party, 1905~1921.	
An Epitome and Brief Review on Carl E. Schorske, "German Social Democracy, 1905~1917." A Joseph Berlau, "The German Social Democratic Party, 1914~1921."	<i>S. Shoda</i> (37)

Reviews and Notes

Published for
KEIO-GIJUKU KEIZAI GAKKAI
(The Keio Economic Society)
Editorial communications to be sent to
the Editor, Keio-Gijuku Keizai Gakkai,
Keio-Gijuku University,
Mita, Minato-ku, Tokyo, Japan.
Price 90 yen

書評及び紹介

フランコ・プリビチェヴィッチ著

『職場委員会運動と労働者の管理、一九一〇—一九二三年』……………飯田 鼎(三)

F・ゲル

『十八世紀ベリにおける生産・価格・土地の収益性』……………渡邊 國 廣(充)

『精神現象学』の疎外論

遊 部 久 蔵

マルクスの疎外論の系譜をさかのぼると、私たちはヘーゲルおよびフォイエルバッハの疎外論にたどりつくのである。私たちはここでマルクスの疎外論を理解するのに必要な範囲内で、ヘーゲルの、とくに『精神現象学』における疎外論についてみるとしよう。

元来、疎外の概念が最初に使われたのは、——コルニユによれば——宗教的概念においてであった。すなわち神はその固有の実体を世界に投影し客観化するという行為によって世界を創造すると説かれた。その説明の仕方は汎神論とキリスト教とは相異なっている。神と人間との本源の統一から分離、疎外が生じるが、キリスト教はこれを罪と墮落との教義で説明する。こうして人間は神と異なつたものとなるが、人間がその下等な性質に気付いて神へ復帰すること疎外は除去される。

つぎにドイツ観念論哲学者たちがこの疎外の概念をひきついだ。

『精神現象学』の疎外論

ヘーゲルのほかとくにフイヒテ、シェリングの名があげられる。彼等は——同じくコルニユによれば——二元論的合理主義をしりぞけて世界を巨大な有機体としてその全体とその生成とにおいて考察したが、それはつねに、存在と事物との全体を活気づける生命の活動のもとでの発展という見地においてなされた。彼等は実在の本質を精神的活動に還元して、世界の発展を精神の発展に帰した。

フイヒテ、シェリングおよびヘーゲルはその政治的社会的傾向の相違を反映して疎外の概念を異にしている。フイヒテは疎外が実在のたえざる転化を決定することを考察してそれに革命的意義をあたえるが、シェリングは世界における精神の客観化が中世にそのより高い程度に達したという原理を主張して疎外に反動的意義をあたえる。

ヘーゲルは絶対的精神の決定的で完全な表現が近代世界においてみられるとし、精神の客観化(疎外)を近代世界にとどめ、保守的意義にこれを解釈する。